第2回aaca建築美術工芸作品展～会員の協奏～

開催日：2026年1月25-31日
会場：建築会館1階ギャラリー（東京・港区）

展覧会委員会

第2回となるaaca建築美術工芸作品展では、単なる作品発表の場にとどまることなく、建築領域・地方会員の参画を促し、分野・領域や地域を越えた会員全体の「交流」を具体的に実現することを、三塩達也理事の指導のもと目指しました。さらに、本展期間前後に他委員会の催事も集中開催し、aacaとしての交流を充実することも試みました。

また、「会員の協奏」というテーマを掲げ、それぞれの作品が美しく響きあう空間とするために、プログラムの組み立てから展示空間の設えまで意見を出し合い、会場デザインを創り上げました。

多種多様な委員会活動を視覚化したパネル展示

来場者が最初に目にするギャラリーエントランスに会長挨拶パネルとaacaの10委員会による活動紹介パネルを展示しました。各委員会の特徴や活動内容を来場者に共有し、委員会への参加促進と共にaacaが芸術に係る多様な方々の思考と対話の積み重ねにより協奏された集まりであることを示す事を意図しました。

建築・美術・工芸が響き合う会場風景

会場には、建築・建築写真・彫刻・美術工芸作品など、40点の作品が展示され、交流を期待できる豊かな空間となりました。関東はもとより大阪、和歌山、京都からの会員の方が出展され、作品の素材も、石、シルク、ステンレス、皮、紙、木、漆、更には廃棄物などを用い、様々な形状で表現された展示となりました。

三菱地所設計からは、食品廃棄物を用いジョイントの組み換えにより形や光の入り方が変化する組立て可搬式の「お茶室」が出展されました。また、リサイクル可能な白色段ボールに建築写真を印刷し、立体的に構成した「建築写真タワー」は、日本設計・久米設計・大林組・大成建設による写真出展により、実現されました。心に残る美しい佇まいのポートレート、天井まで光彩が広がる幻想的な空間表現、洗練されたアーティスティックデザインなど、各社の視点が協奏されました。

作品を介して、想いが行き交うギャラリートーク

会期中には、来場者の体験価値を高める取り組みとして、出展者が作品への想いや素材へのこだわり、制作過程などを来場者と対話する「対話型ギャラリートーク」を企画しました。作品を通し交流の機会が限られている会員同士の交流が育まれました。

また、建築・美術・工芸が「協奏」し生み出された実作品の紹介を通じて、「協奏」がもたらす創造性の広がりと新たな視座を拓くことを意図した山極裕史氏による講演を、作品が佇む空間にて実施しました。その他、会期中には体験型ワークショップ（14頁参照）、新春の集い（9頁参照）、会期終了翌日には七福神を巡る景観の検証（15頁参照）が開催されました。委員会が協奏し、普段個々に活動する会員へ、見る・知る・交わる・体験が重なり合う場をつくり、新たな可能性の広がりが生まれたことは、集合体であるaacaだからこそだと感じています。

建築美術工芸作品展は、同じ領域ごとに作品を集約して展示するのではなく、領域を越えた交流から「協働」が生まれ、新たな創造へとつながる“はじまりの場”となることを目指しています。aacaに息づく多様性こそが、創造の原動力です。建築・美術・工芸それぞれの思考や技術、価値観が交差し、響き合うことで、これまでにない表現や空間の可能性が立ち上がることを期待しています。

新たな創造のはじまりの場として

「協働」を実現するためには、分野や領域の違いを「視点の差異」や「新たな気付き」へとつながる豊かな資源として受け止め、対話と実践を積み重ねていく姿勢が不可欠です。このプロセスこそが、個では到達し得なかった創造の地平が拓かれ、未来の文化や空間をより豊かなものへと導く力になると信じています。

協奏された実作品を紹介する山極氏の講演風景

今後も、展示と対話、提案と実践を往還しながら、異なる領域がゆるやかにつながり続ける「機会」として、建築美術工芸作品展を新たな空間文化の起点へと育て提供していきたいと思います。さらに、aacaらしい「協働」から生まれる関係性を、30cm立方での空間創造を広く公募する「BOX展」へと展開し、両者を循環させることで、aacaの魅力をより広く発信し、豊かな文化の創造へ繋がるよう尽力したいと思います。

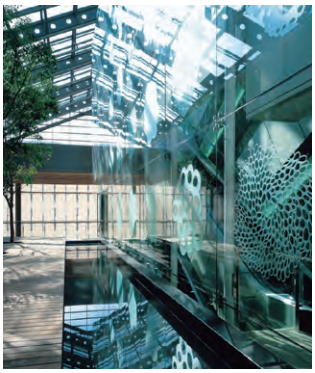
（委員長 齋藤卯乃）

講演「Interface between architecture and art −空間を豊かに−」について

「会員の協奏」として建築・美術・工芸が協働した作品としてAACA賞などを受賞したプロジェクトを中心に説明しました。

丸ビルと丸の内仲通り

丸ビルでは基本計画段階でアーティストの選定に入り、事業者はパーセントフォーアートの概念を持ち商用ビルにおいてアートの設置が環境を向上させるだけではなく集客にも貢献すると理解を示していただいていました。



丸ビル5階空中庭園 ―ガラス彫刻のアート

アートコミッティの設立を皮切りにアート設置に関する考え方の整理、アーティストの選定方法、制作、設置などが議論され実現に至りました。このプロジェクトで重要だったのは選定されたアーティストと空間について議論し最終的には空間と一体的なアートを目指したことです。制作も国内で行い双方向の議論により各々の空間を創りました。見る側は作品として置かれたアート作品ではないためアートとしての意識は薄いかもしれませんが空間としての厚みは増し、より豊かな環境を提供できたと感じています。

パーセントフォーアートへの理解があったことは昭和30年代の丸の内総合改造計画に遡ります。当時、丸の内は高度成長期で近代化されたビジネス中心の街でした。それに対して、働く人の憩いの空間となるように丸の内全体をつなぐ丸の内仲通りの歩道に箱根彫刻の森美術館とタッグを組み彫刻を設置し定期的に彫刻を入れ替えました。

この試みは現在も継続し、管理運営体制も両社により、さらに強いものになっています。環境・就業者に対するアートの関与がエリアにアートを取り入れる始まりだと考えています。

丸の内仲通り ―連続する沿道アート

丸の内パークビル・三菱一号館

復元した三菱一号館は美術館として利活用され、街区は東京駅方向から丸の内仲通りにつながる動線として都市の中庭である一号館広場を設けています。この広場は三菱一号館に因んでイングリッシュガーデンを基に計画し来街者・就業者の憩いの広場となるように計画しました。併せて美術館と一体となるアートの広場も考え方に込められています。

東京駅と丸の内仲通りをつなぐ役割として、丸の内仲通りの延長あるいは分岐としても、丸の内仲通りの彫刻と同じコンセプトにより定期的に彫刻が入れ替わります。

一号館広場 ―仲通りの延長のアート

大手町パークビル・大手門タワー

お堀側に計画したホトリア広場のアートは皇居東御苑との繋がりを意識した緑豊かな空間で災害時に東御苑の災害時避難場所の補助をする役割もあります。

このプロジェクトでのランドスケープにおけるアートはガラス工芸家でaaca会員の新實広記さんと協働しました。新實さんは10名ほどの候補アーティストの中から選ばれ、コンセプトを議論し協働で方向性を決め作品を提案していただきました。江戸城への物資の搬入経路であった道三掘りや当時のレジャーの一つであった舟を用いた花見や余暇をイメージして舟形をした無垢のガラスの削り出しによる《VESSEL》が提案され、池や桜を当時の風物詩としての記憶として外構の空間を構成しています。

ホトリア広場 ―無垢のガラスアート

伝えたいこと

建築とアートの融合には様々な進め方がありますが、結果は空間をより豊かにし、人々に対してより良い環境を提供できることに異を唱える方はいないでしょう。現在、パーセントフォーアートは法的根拠をメインに半強制的にアートを取り入れる議論が進んでいると思いますが個人使用以外の商用ビル・住宅などの利益確保は当然でテナントの売上や土地の価値の向上も当然です。しかし心地よい空間は集客も入居希望者も集まります。それを実践する考え方、豊かな空間を創る方策としての建築とアートの融合を事業者にも理解していただく必要もあると思います。

作品展は個人の活動発表の場で、その場を協働でつくり、BOX展は異業種間の協働による空間提案と理解しています。このような発信が、さらに心地の良い空間を創ることに寄与できることを願っています。

（アドバイザー 山極裕史）